

新・瘠我慢の説

経済学者
渡辺利夫

第二十四回 杉山龍丸という人生

「グリーン・リヴォリューション」とは、一九六〇年代の後半に開始された米の高収量品種の普及・拡大運動のことであり、これによりアジアの国々は食糧不足状態から解放された。この革命は、フィリピン政府、フォード財団、ロックフェラー財団の三者の協力により一九六〇年にマニラ郊外のロスバニョスにあるフィリピン大学農学部内に設置された国際稲研究所（IRRI）において始まった。世界各地から稲の優良品種を収集、それらを人工的に交配することによって高収量の改良品種の創生をめざし、ここで開発されたIR8と称される決

定的な改良品種が革命の起点となった。

アジアにおける在来の米品種インデイカの単収は低い。収量を上げようとこれに肥料を施すならば、茎が伸び葉が茂り収穫前に倒伏して増収には繋がらない。一九六〇年代の後半にいたり、草丈が短くて太く容易には倒伏せず、葉が直立して効率的な光合成を可能にし、実る穂もたわわな品種の開発に成功した。単収（一定面積当たりの収量）は在来種に比べて格段に高い。改良品種の導入によってアジアの食糧供給には画期的な変化が生じた。

IRR8 開発の長い前史のなかには、忘れられて久しい一人の日本人がいる。福岡藩士・杉山三郎平の長男の茂丸に始まる三代目の龍丸である。インド・パンジャーブ州の飢餓の惨状に心を痛め、その救済に全力を注がねば己の生きている証しが立てられないという悲壮な決意を固めて、献身を重ねた一人の日本人である。興亜主義者として明治日本の指導者を動かした黒幕・杉山茂丸を祖父とし、アジア開放を夢見て資金源確保に努めた杉山泰道(夢野久作)を父とする龍丸は、パンジャーブ地方の飢餓救済を杉山家三代の宿命だとの思いを定めた。磯永吉が台湾で開発に成功した「蓬萊米」と呼ばれる稲の改良品種をパンジャーブ州に導入しようと苦闘、ついに成功をみたその物語のなかに緑の革命のもう一つの源流がある。

稲の改良品種とは、優れた特徴をもつ品種の雌蕊に別の優れた特徴をもつ品種の花粉(雄蕊)を附着させて交配し、双方の優れた特徴をあわせもつ新品種をつくりだすことである。交配の結果生

まれる無数の品種のなから台湾の土壤、気象条件に見合う品種を選別する作業には、実に粘り強い努力が必要であった。磯永吉が部下の末永仁とともに二十年余の歳月をかけて手にした改良品種が蓬萊米である。昭和の初期、内地で栽培面積の大きかったのが「旭」三十三万ヘクタール、これに次ぐ「愛国」が十七万ヘクタールであったが、蓬萊米は二十五万ヘクタール、大日本帝国第二の栽培面積を誇るまでになった。

龍丸がインドの飢餓救済を思いついたのは、ある偶然からであった。ガンジー翁の思想に共鳴し、インドの宗教的共同体組織で貧民救済活動に携わっていた旧友の一人から、ガンジーの教えを受けて日本の陶器製造技術を習得しようとして来日していたインドの若者を紹介されたことに始まる。龍丸の熱心な教育に促され、その後も何人かの優れたインド青年が龍丸のところを訪ねてきては、稲作や農機具などの技術を習得しようとしていた。龍丸は何人かの知己を介してその期待に応えつづ

けた。

龍丸の指導ぶりが帰国した若者からインド政府に伝えられたらしい。昭和三十七年の十一月にガンジー翁の弟子たちによる共同体運動サルボダヤ・サンメランの大会がインド中西部のマハラシュトラ州で開かれるから、これに参加してほしいという招待状が龍丸のところへ届いた。大会責任者の名前と一緒に、何とジャワハルラール・ネルー首相とモラルジー・デサイ蔵相を加えた三者連名の招待状であった。

この会議への出席を機に龍丸は昭和三十七年十一月から翌年四月まで、乾季のインド北部を精力的に歩いて観察を繰り返し、その圧倒的な貧困、当時、不可触賤民せんみんといわれた絶対的貧困者の惨状を目の当たりにし、この世の果てでもない残酷な現実に胸を塞ふさがれた。龍丸が残りの人生を賭けてやり遂げねばならないものがここにあるとの思いを定めた旅であった。パンジャブ州のあちらこちらを歩きながら、草もろくに生えていないこの砂漠や乾

燥地帯の地下には幾重にも堆積たいせきした地層があって、そのなかに伏流水ふくりゅうすいが存在しているはずだと龍丸は考えた。伏流水を利用して植林に成功すればこの地の植生を変えることができるかと確信したのである。

龍丸がネルー首相やデサイ蔵相から招待されてサルボダヤ・サンメランの大会に出席し、その後はパンジャブ州の村々の現実を観察する旅をつづけていることが、同州の総督ベトラ・タヌ・ピラトの知るところとなり、龍丸は州都チャンディガールの総督府に招かれることになった。ピラトは問う。

「日本はあんなに発展したのにインドの開発発は遅々として進まないのはなぜか、どこから手をつけたらいいのか、杉山さんのパンジャブ州での観察からそこところが知りたい」

龍丸は真正直に答える。

「日本人はどんなに貧しい状態にあっても村の植林や間伐かんぱつを怠おこたることはない。しかしこの地では植林をみかけることは滅多にない。まず植林にエネルギー

ーを注ぎ、植林を通じて植生を変え、そうして食糧自給を図ること、これが緊急の課題ではないか。植林してから成木になるまで五年ほどもかからないユーカリの根は成木になると地表の高さの三倍ほどになる。この根が地中を張りつめてヒマラヤ山系から流れる伏流水を堰き止め、これを吸い上げれば乾燥地を緑地に転換させることができる。ここに台湾の蓬萊米という品種を導入してさらに改良を繰り返すならば、食糧の増産は可能だ」

ヒマラヤ山系から無数の伏流水が流れてくるニューデリーからアムリツタルまでの国際道路沿線四百七十キロメートルにユーカリ樹林帯を造成、沿線のそこに伏流水が溜まり、水田ができ始める。この水田に蓬萊米を導入するという構想に龍丸は生涯を賭けようと考えたのである。福岡県の香椎に祖父の茂丸が開園した広大な農園があり、この農園を守り拡充したのは父の泰道である。農園を売却してパンジャープの開発資金に充てることは興亜主義者の祖父と父の意に沿うはずだと考えて龍丸の意志は固まった。

当時の中印蜜月時代に、台湾から蓬萊米をインドに搬出するというのは政治的難題であった。しかし龍丸は孫文生誕百年祭に、孫文の革命を支援した日本人の杉山茂丸の孫として招かれ、この場で龍丸は蒋介石に向かって必死の思いで蓬萊米のインドへの搬出の必要性を説いてその実現にこぎつけた。インド政府は龍丸の献身に対して仏舍利塔を進呈、これを納めた、ストゥーパ様式を模した塔は現在もなお福岡県の北西部、玄界灘に向かつて突き出た糸島半島の妙見山の山上に据えられている。

しかし周辺は深い樹木に覆われ、塔にいたる道も定かではない。木の根が食い込んで台座が崩れかけ白壁が剝落している。龍丸ははやくも忘れられた日本人になってしまった。昭和六十二年九月没、享年六十八。

わたなべとしお

一九三九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士、筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長・総長を歴任。八五年「成長のアジア、停滞のアジア」で吉野作造賞受賞。八七年、「開発経済学」で大平正芳記念賞受賞。九〇年、「西大正洋の時代」でアジア・太平洋賞大賞受賞。九六年、「神経症の時代」で開高健賞正賞受賞。二〇二二年、正論大賞。